

ギリシア文字の/w/——クシャン王 Vima Kadphises の表記

中村雅之

1. クシャン朝コインの銘文

1世紀前半(?)のクジュラ・カドフィセスに始まるクシャン朝の貨幣は一般にギリシア文字ギリシア語(とカローシュティー文字ガンダーラ語)の銘文を持つが、曾孫のカニシカ王は初期のみギリシア語を用い、その後ギリシア文字バクトリア語へと変えた¹。バクトリア語を表記したギリシア文字の特徴は、ギリシア語になかった/f/を表す文字「p」を作ったことと、/w/ないし/v/を表す綴りとして「OO」を用いたことである²。もっとも、これらの綴りはカニシカ以前のギリシア語銘文中においてもバクトリア語固有名詞の表記に用いられているから、バクトリア語をギリシア文字で表記する試みはかなり早くからなされたと考えられる。本稿で扱う「OO」もカニシカの父であるヴィマ・カドフィセスのギリシア語貨幣銘文に見える。

2. /w/を表す「OO」

2世紀前半(?)のヴィマ・カドフィセス(Vima Kadphises)は貨幣銘文のギリシア文字では「OOHMO ΚΑΔΦΙΧΗC」と表記されている³。ラテン文字(ローマ字)に翻字すれば「ooemo kadphises」ということになる。日本語版ウィキペディアにおいてこの表記を「オオエモ・カドフィセス」と読んでいるのは解釈を加えずに拾い読みしたものであろう。「Φ(ph)」がこの時代に/f/であったかどうかは議論の余地があるが、主題ではないので今は触れない。

「OO」がカローシュティー文字銘文の「v」に対応していることから、この綴りが/v/や/w/のような音を表していると思ふことは許されよう。今仮に「OO」が/w/を表すものとして、そのような綴りが作られるのにどのような背景があったかについて考えてみたい。

3. /u/を表す文字

ギリシア文字では/u/を表す単字はなかった。古典期以前のギリシア語では「Υ, υ(ユプシロン)」が/u/を表していたが、古典期にはすでに/y/に変わっていた。そのためバクトリア語の/we/や/wi/をギリシア文字で記す際に、ラテン語のように/w/に単字の「V, u(/u)」を当てるといった簡易な方法を取ることができなかった。ギリシア語の/u:/は「OY, ou」で表されるが、もともと/ou/と発音されていたものが古典期までに/u:/になったもので、本来的に長母音であった。その点からも/w/に当てるのはためらわれたであろうし、なにより/we/を「OYH」のように綴るのは直観的に分かりやすいとは言えない。

ギリシア語に短母音の/u/がなかったらしいことはカニシカ王のコインにしばしば見える“仏陀”の表記からもうかがえる。カニシカのコインでは裏面に種々の神が描かれるが、その一つとして仏陀も描か

¹ バクトリア語は東イラン語群に属し、ソグド語に近いとされる。

² ギリシア語では古くは/w/を表す文字として「p」(ディガンマ)があったが、古典期にはすでに使用されなくなっていた。

³ /s/を表す「Σ(シグマ)」には異形として「三日月のシグマ(lunate sigma)」と呼ばれる「C」がある。この形はアレクサンドロス大王以降のヘレニズム諸国で頻繁に用いられた。クシャン朝でも「Σ」と「C」が区別なく用いられる。

れ、銘文は金貨では「BOΔΔO」(boddo)と記され、銅貨では「BOYΔO」(boudo)と記される。二つの綴りが現れる理由は、おそらく短母音の/u/を表記できないことによる。表そうとしている音は/buddo/なのであろうが、金貨では近似的に/boddo/とし、銅貨では/bu:do/とした訳である。

4. バクトリア語の/w/

短母音の/u/を表すことができない以上、/w/を表す最善の方法はないことになる。そこで次善の策として「OO」という表記を選んだのであるが、その事情はおそらく次のようなことであろう。

当時のギリシア語においては「Ω, ω」(オメガ)が広めの長母音/o:/で、「O, o」(オミクロン)が狭い短母音/o/であった。そのため、短母音/u/および子音/w/にもっとも近い表記が「o」ということになる。最終的に選ばれた「OO」という表記は一見奇妙な印象を与える。なぜなら「O」は短母音であり、長母音を意図するなら「Ω」とするはずであるから、長母音として「OO」と表記する必要はなく、これが通常綴りでないことは一目瞭然である。そこで/w/を「OO」で表すという取り決めがなされた場合、綴りの奇妙さとともに忘れがたく直観的に理解しやすい表記として受容されたと思われる。

5. 英語の「w」

最後に、参考として英語の「w」について触れておく。古英語においてはラテン文字を導入した段階で母音字「u」の他に子音の「f」(/f/および/v/)を持っていたが、/w/を表す文字はなかった。そこで/u/に類似したこの/w/を表すための表記として「uu」を用いるようになり、後に連ねて「w」という文字になった。/w/という音を表すために類似音を重ねて綴るという発想はバクトリア語の「OO」と変わらない。英語ではこの「w」の文字を「二重のU (double U)」と称する。バクトリア語の「OO」という綴りも、いわば「二重のO」という一個の子音字と見立てて、「OOHMO」を/wēmo/と読ませることにしたものである。